

病害虫発生予察情報予報第8号（11月の予報）

佐賀県

目次

1. 11月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 11月の予報	
<u>普通作物</u> （オオムギ、コムギ）	3
<u>野菜</u> （イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、タマネギ、野菜類共通）	5
<u>花き</u> （キク）	16
5. <u>病害虫診断状況</u>	19
6. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	20
7. <u>農薬の適正使用について</u>	21

今月のトピックス

イチゴうどんこ病が多発生しています。果実での発生を防ぐため、防除を徹底しましょう。

1. 11月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



大豆の紫斑病



キュウリの黄化えそ病
（ミナミキイロアザミウマが伝搬）



イチゴのうどんこ病



キクの白さび病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45 - 8153 FAX (0952)45 - 5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成26年10月24日 福岡管区気象台発表】
11月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

11月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	30	40	30

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
11月の平均気温	12.9℃	-0.5℃ ~ +0.8℃
11月の降水量	75.9mm	73% ~ 120%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 11月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		防除のてびき 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
オオムギ	網斑病	並	並	136～137	
	縞萎縮病	並	並	141、484	平成16年以降、発生面積は極わずかである。
	斑葉病	並	並	135	
コムギ	シロトビムシ類	並	並	142～143	
	縞萎縮病	並	並	141、484	平成6年以降、発生を確認してない。

【特記事項】

1. 大豆の紫斑病対策として適期収穫を行い、乾燥施設へ速やかに搬入する。
2. 近年、オオムギ網斑病が広範囲に発生し、一部で多発生圃場もみられている。本病及び麦類裸黒穂病、オオムギ斑葉病は、種子伝染性病害であるため、健全種子を使用するとともに、種子消毒を徹底する。
3. シロトビムシ類の常発圃場（コムギ、ハダカムギ等）では、種子粉衣または塗沫処理を徹底する。

オオムギ

1. 網斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
26年産大麦での発生圃場率は86.4%、発生茎率68.9%（平年86.8%、25年産78.9%）であり、平年よりやや少なく25年産よりやや多かった（図1）。〈－～±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)本病は、種子伝染が主体であるため、健全種子を使用する。
(2)本病の防除のため、トリフミン水和剤あるいはヘルシードT水和剤による種子消毒を徹底する。

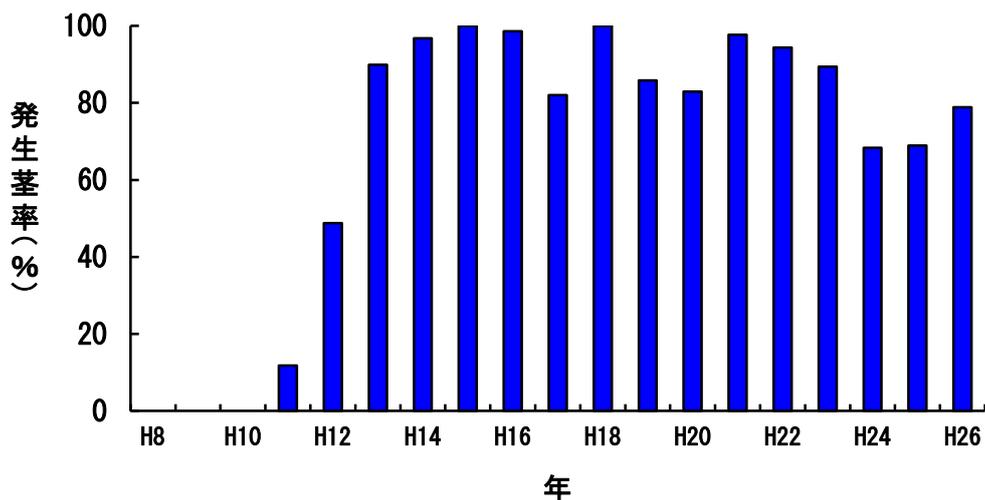


図1 オオムギ網斑病の発生基率の年次推移(4月下旬～5月上旬調査)

コムギ

1. シロトビムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 26年産小麦での発生圃場率は1.7%（平年5.7%、25年産2.9%）であり、平年よりやや少なく25年産並であった（図2）。〈-～±〉
- (2) 気象予報ではやや少発生の条件となっている（播種後の低温や地表面が湿る程度の降雨では、本虫の活動が活発となり被害が多くなる）。〈-～±〉（気温やや高：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 播種時期は遅くならないようにするとともに、種子粉衣または塗沫処理を徹底する。
- (2) 被害が多い圃場では、芽出し播きや芽出し乾燥播きを行う。
- (3) 被害が著しい圃場では、オオムギを作付けする。

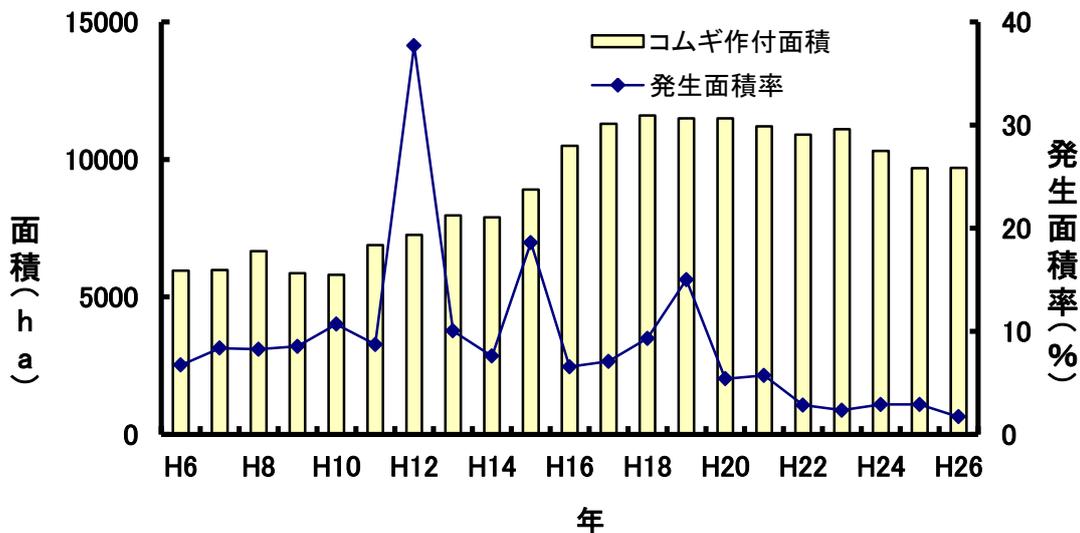


図2 シロトビムシ類の発生面積率の年次推移

野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	多	多	188～191	平成26年10月29日 付注意報第7号参照
	ハダニ類	やや多	多	199～200	
	アブラムシ類	やや少	並	204～205	
ナス	アザミウマ類	並	やや少	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	少	やや少	246	
キュウリ	べと病	やや多	多	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	褐斑病	やや少	並	170～172	
	アザミウマ類	やや少	やや少	148～149、183～184	
	コナジラミ類	やや少	並	145～147、181～182	
トマト	コナジラミ類	並	やや多	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	やや少	やや少	154～155、223	
タマネギ	ボトリチス葉枯症	並	並	275	
	ネギアザミウマ	やや多	やや多	280～281	
野菜・花き 共通	チョウ目害虫（ハ スモンヨトウ、オオハバ コガ）	やや少	やや少	156～158 イチゴ：200～202 ナス：241～242 トマト：222、224	

【特記事項】

【イチゴ】

- イチゴうどんこ病の発生が多い。果実での発病を防ぐため、定期的な防除を実施する。
(平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号参照)。また、次年度親株についても防除を徹底し、春季の発生を抑える。
- ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う。特に、天敵を用いて防除を行う圃場では、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

- コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、発生初期の防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病、キュウリ退緑黄化病の発生がみられる場合には、発病株は伝染源となるため早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。

2. チョウ目害虫については、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。

【アスパラガス】

1. 褐斑病等の次作への伝染源対策として、収穫終了後も防除を徹底する。

【タマネギ】

1. 近年、タマネギべと病の多発が続いている。本圃での発生を抑えるために、苗床からの防除を徹底する。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：10月21日～23日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は33.0%（平年7.7%、前年1.0%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)病害虫防除員の調査(6圃場)では、1圃場で発生がみられ、発生株率は8.0%である。〈±〉

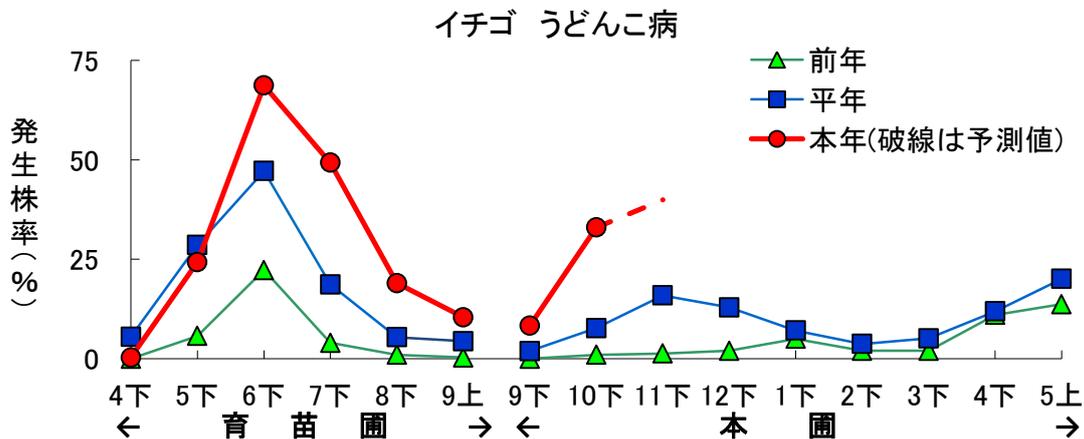
(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3)詳細な防除対策は[平成26年10月29日付病害虫発生予察注意報第7号](#)を参照する。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

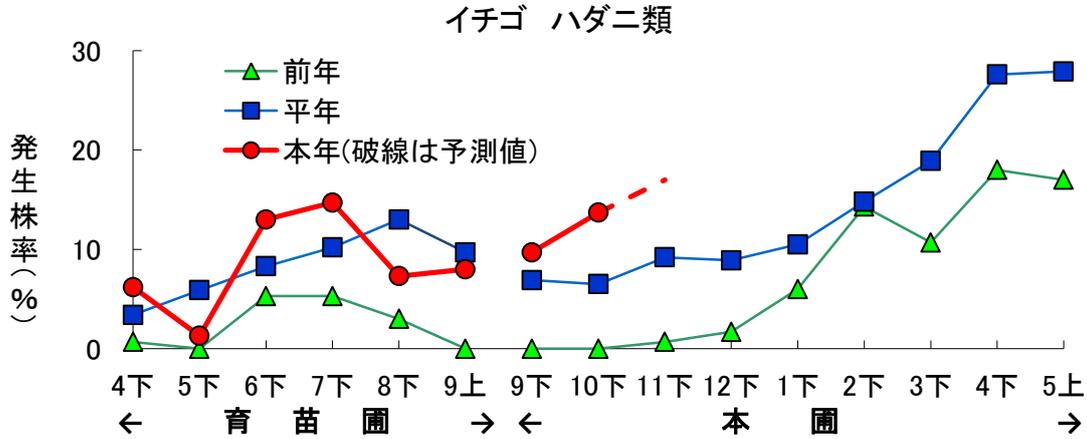
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は13.7%（平年6.5%、前年0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉

(2)病害虫防除員の調査(6圃場)では、6圃場とも寄生が見られ、寄生株率は10.3%である。〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 近年、薬剤感受性の低下が認められるため、天敵を用いた総合的な防除を行う。なお、天敵を導入する際には、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



ナス (促成)

(巡回調査: 10月21~22日)



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや少ない)

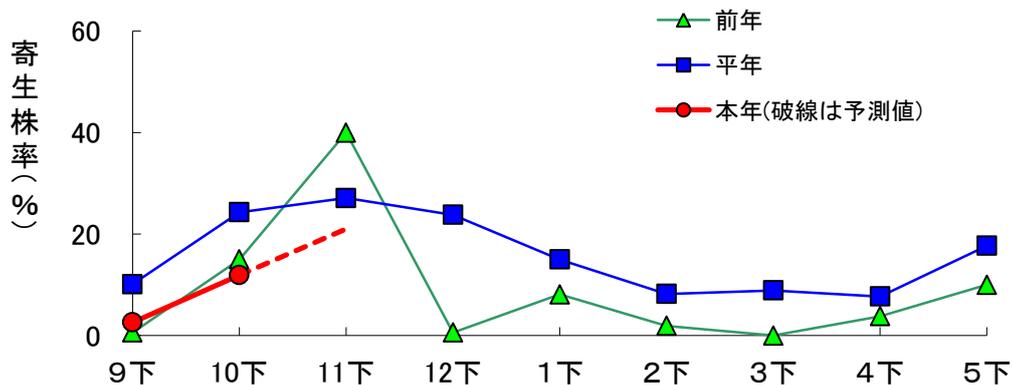
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は11.9% (平年24.3%、前年15.0%) であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (2) 病害虫防除員の調査(4圃場)では、4圃場とも寄生が見られ、寄生株率は11.3%である。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は36.3%（平年57.5%、前年41.9%）で、平年よりやや少なく前年並である。〈ー～±〉

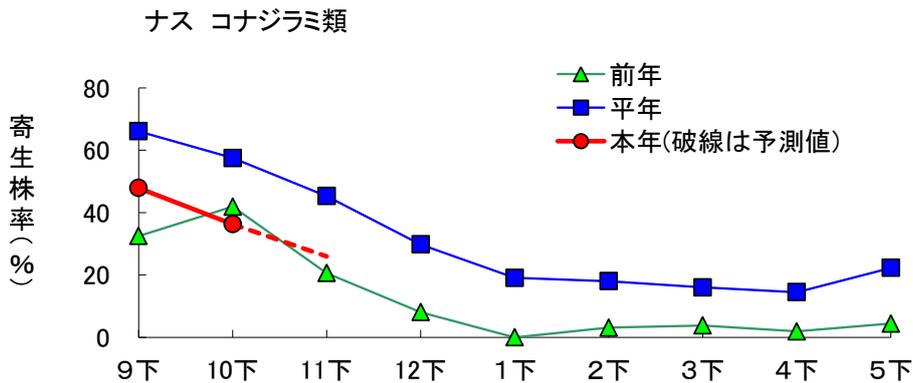
(2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、4圃場とも寄生が見られ、寄生株率は18.8%である。〈ー〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。

(2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

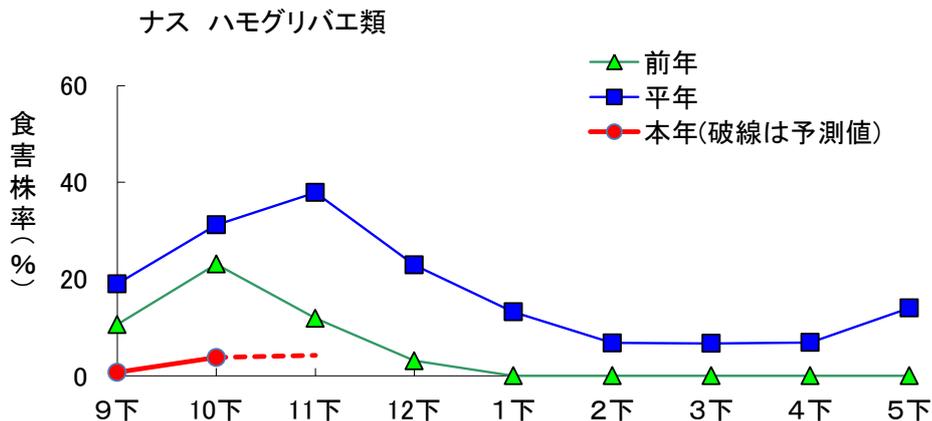
(1) 巡回調査では、食害株率は3.8%（平年31.2%、前年23.1%）で、平年及び前年より少ない。〈ー〉

(2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、2圃場で食害が見られ、食害株率は5.0%である。〈ー〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



キュウリ（抑制）

（巡回調査：10月21日～23日）



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

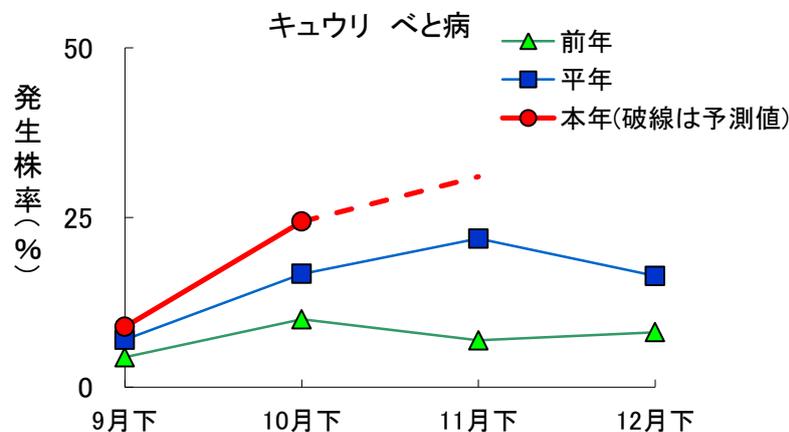
(1)巡回調査では、発生株率は24.4%（平年16.7%、前年10.0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)適湿管理に努める。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

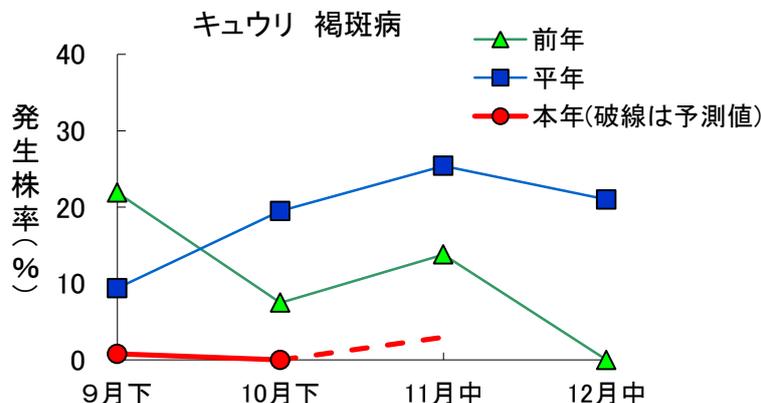
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年19.5%、前年7.5%）。〈-～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

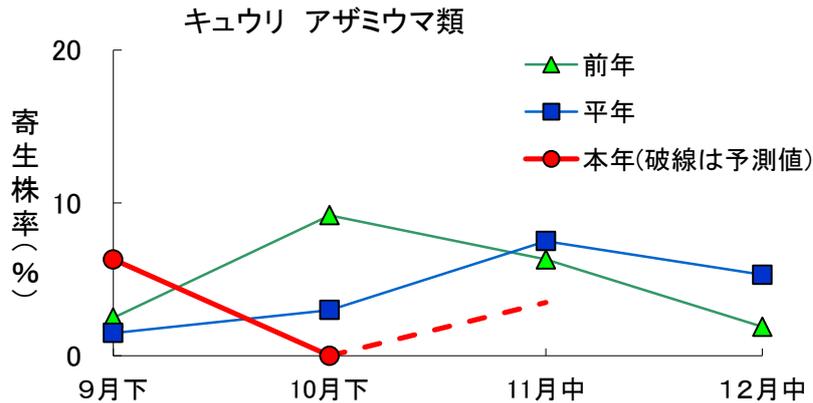
(1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年3.0%、前年9.2%）。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。

(2) ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、発生初期からの防除を徹底する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は10.6%（平年18.5%、前年18.3%）であり、平年および前年よりやや少ない。〈-~±〉

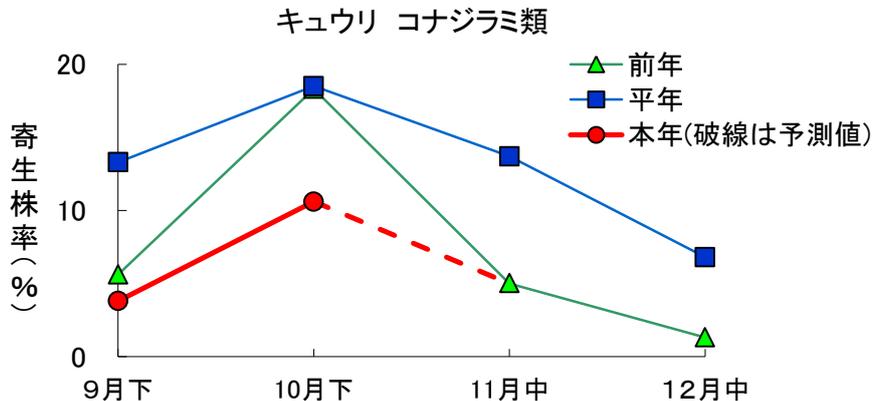
3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。

(2) タバココナジラミはキュウリ退緑黄化病を媒介するため、発生初期からの防除を徹底する。

(3) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。

(4) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



トマト

(巡回調査：10月21日～23日)



巡回調査時の生育状況

1. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は5.7%（平年6.8%、前年5.0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、5圃場で寄生が見られ、寄生株率は9.2%である。〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

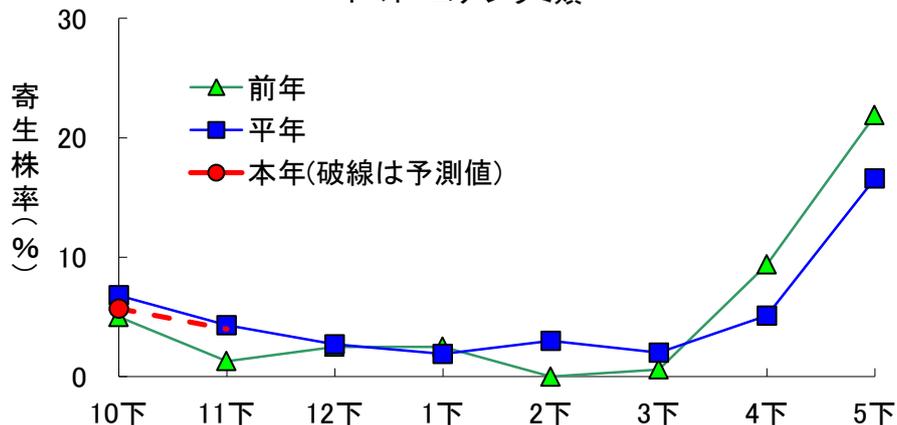
(1)施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。

(2)コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。

(3)幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(4)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

トマト コナジラミ類



2. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや少ない**（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

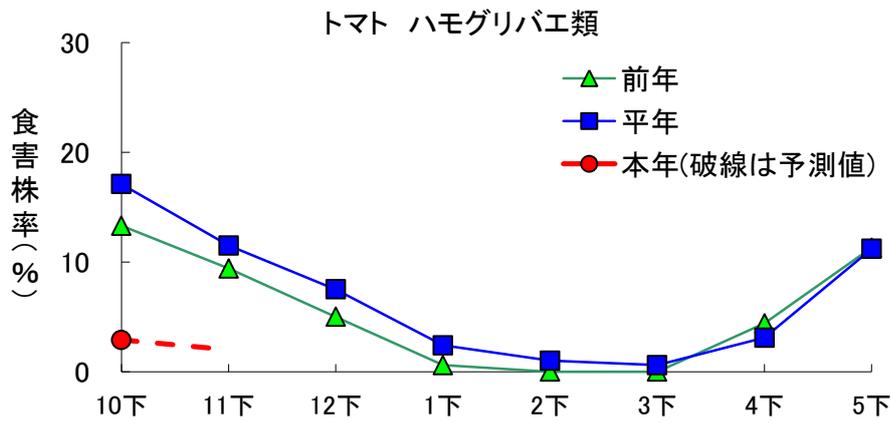
(1)巡回調査では、食害株率は2.9%（平年17.1%、前年13.3%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-～±〉

(2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で寄生が見られ、寄生株率は0.3%である。〈-～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)幼虫寄生葉は除去し、施設外へ持ち出して処分する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



タマネギ (苗床)

巡回調査日：10月23日



巡回調査時の生育状況

1. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

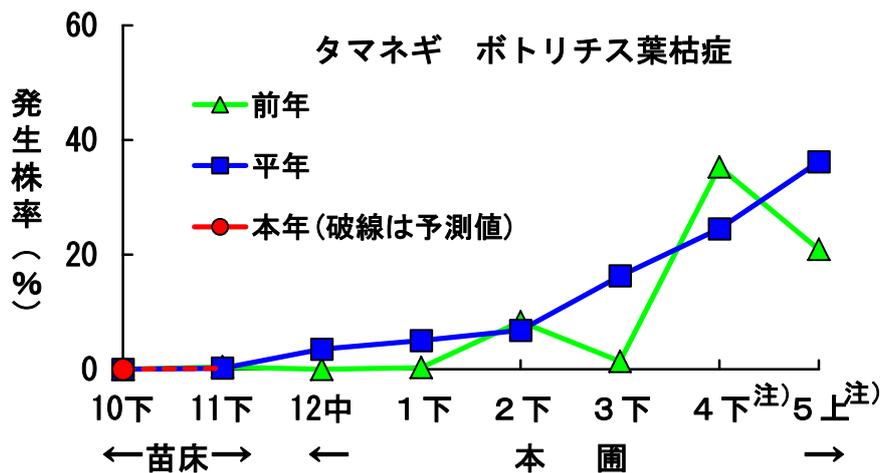
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない（平均発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)育苗期からの防除を徹底する。



注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

2. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

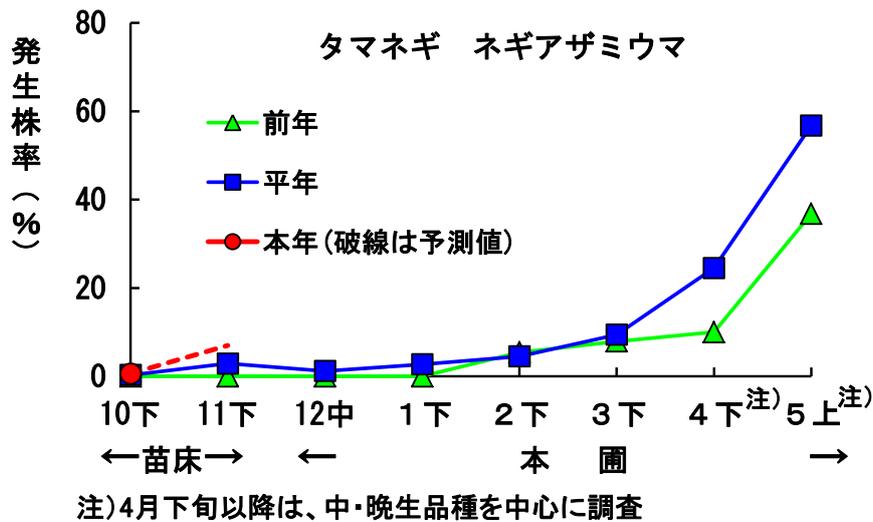
(1) 巡回調査では、寄生株率が0.6%（平年0.3%、前年0.0%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈+～±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、十分量の薬剤を散布する。

(2) 本圃へ持ち込まないように、苗床で防除を徹底する。



野菜共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）

1) 予報の内容

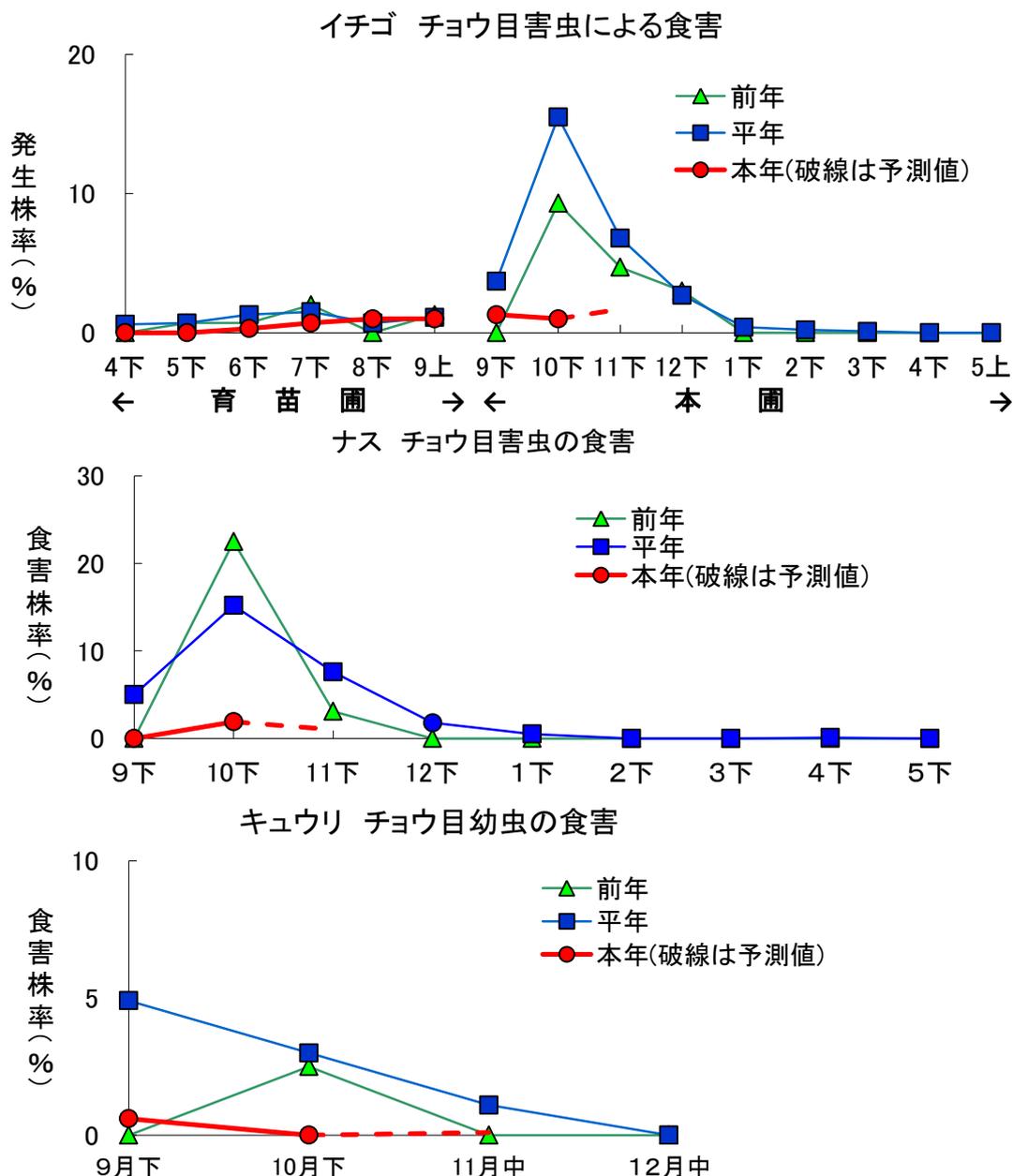
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、イチゴにおける食害株率は1.0%（平年15.5%、前年9.3%）であり、平年および前年よりやや少ない。（←～±）
- (2) 巡回調査では、ナスにおける食害株率は1.9%（平年15.2%、前年22.5%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。（←～±）
- (3) 巡回調査では、キュウリにおける食害を認めていない（食害株率：平年3.0%、前年2.5%）。（←～±）
- (4) フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は平年よりやや少なく推移している（図1～3）。（←～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。
- (2) 幼虫の齢が進むと薬剤の効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。



チョウ目害虫のトラップデータ

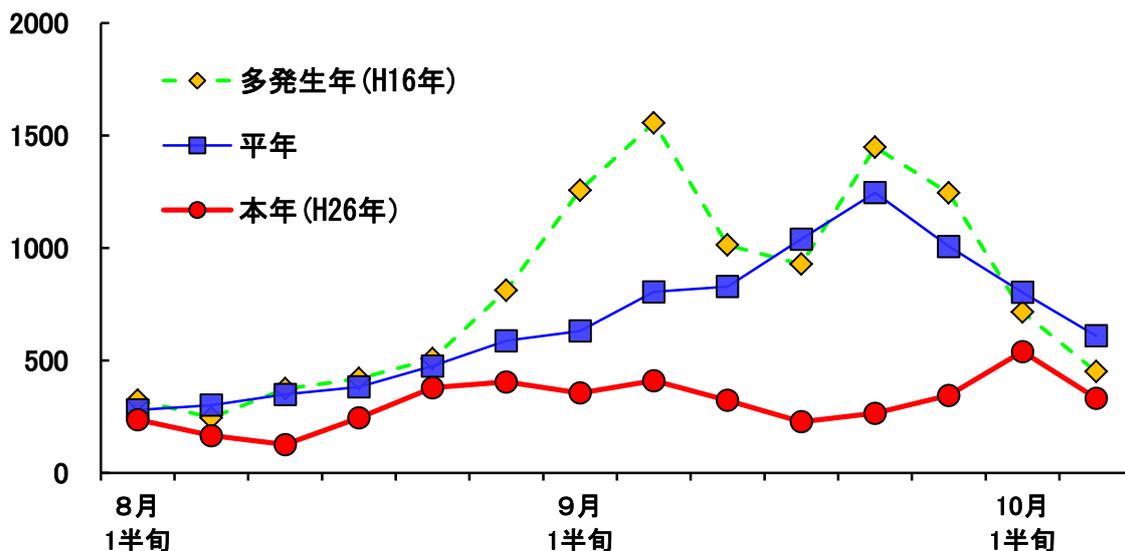


図1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

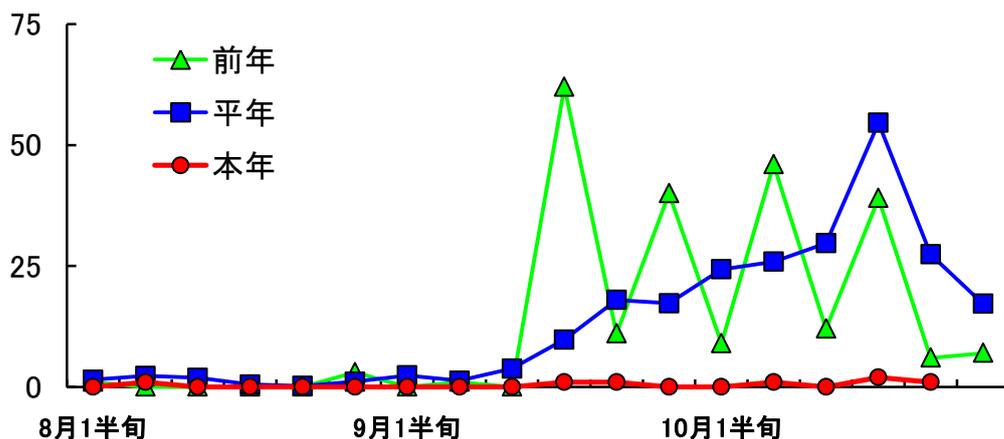


図2 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
（川副町・農業試験研究センター調査）

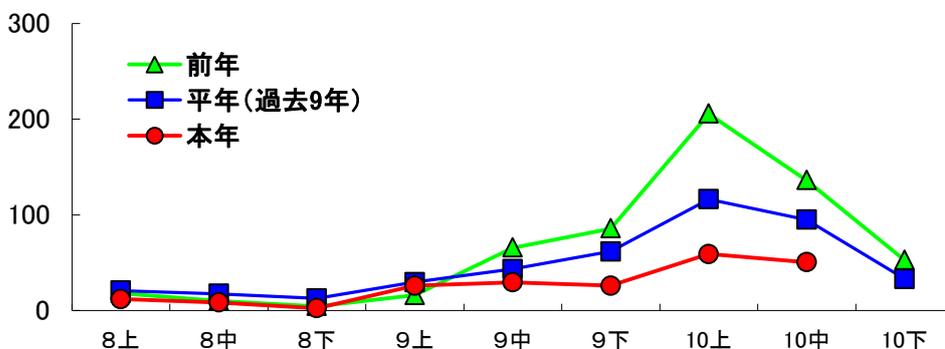


図3 フェロモントラップによるオオタバコガの旬別誘殺数
（病害虫防除員調査による県内2地点の平均誘殺数）

([野菜共通に戻る](#))
([花きに戻る](#))

花き

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
キク (年末出荷タイプ)	白さび病	並	並	343～344	
	アザミウマ類	並	やや多	348～350	
	アブラムシ類	多	多	346～347	
	ハダニ類	並	並	347～348	
	ハモグリバエ類	並	並	351	
野菜・花き共通	チョウ目害虫	やや少	並	350	

【特記事項】

1. 気温の低下に伴い、夜間にハウスを閉め込むようになると白さび病が発生しやすくなるため、定期的な予防散布を行う。
2. キクえそ病やキク茎えそ病を媒介するアザミウマ類に対しては、発生源となる圃場周辺雑草を除草するとともに、発生初期からの防除を徹底する。

キク

(巡回調査：10月21～23日)



巡回調査時の生育状況

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

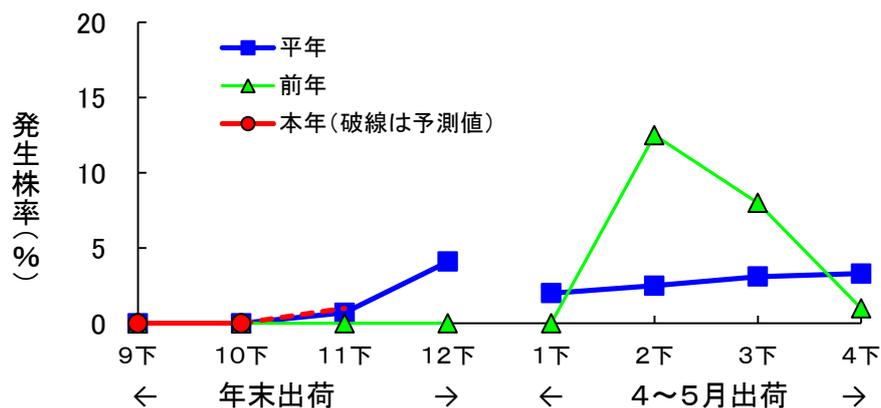
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉
- (2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病してからでは防除が困難となるため、予防防除に努める。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。
- (3) 施設内が多湿にならないように換気を図る。

キク 白さび病



2. アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

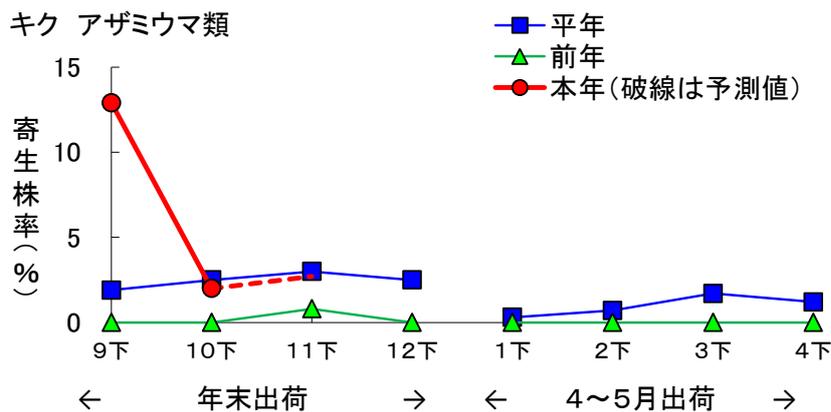
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は2.0%（平年2.5%、前年0%）であり、平年並であり、前年よりやや多い。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生初期からの防除を徹底する。

(2)圃場周辺の雑草は生息源となるため、除草を徹底する。



3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

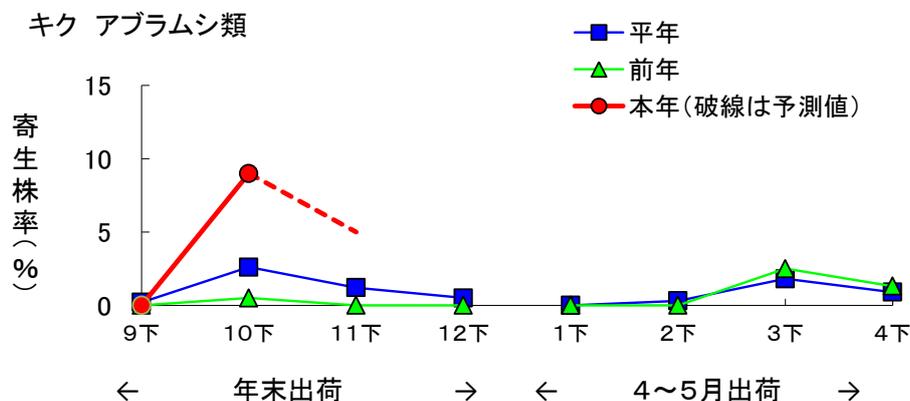
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は9.0%（平年2.6%、前年0.5%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生初期からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

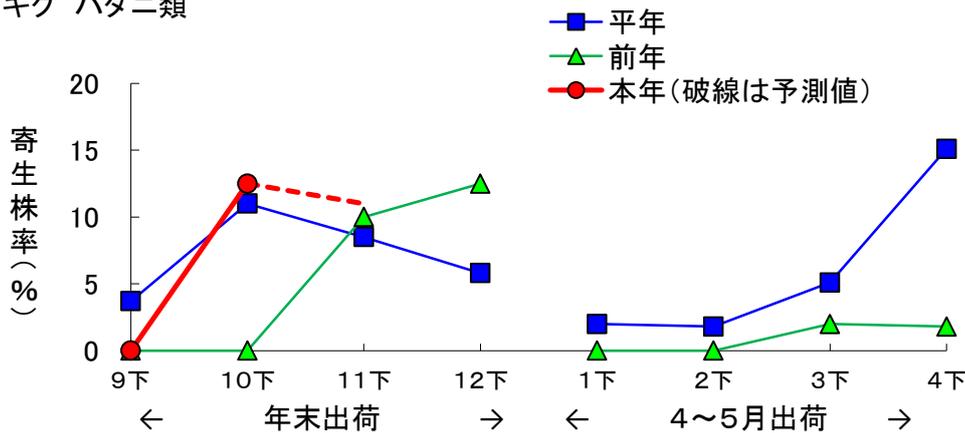
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は12.5%（平年11.0%、前年0%）であり、平年並で前年より多い。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

キク ハダニ類



5. チョウ目害虫（オオタバコガ、ハスモンヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

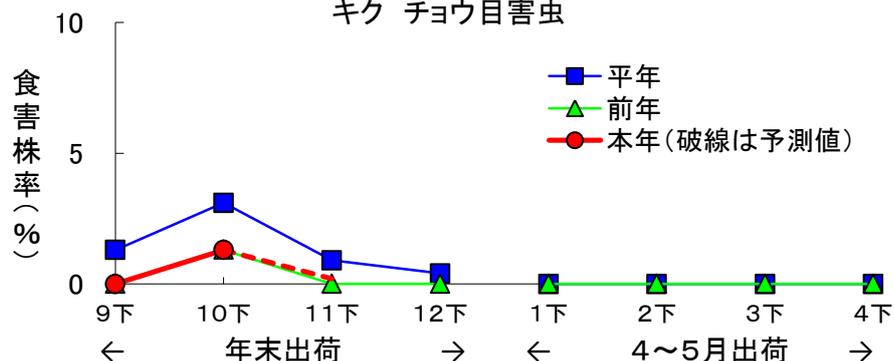
(1) 巡回調査では、食害株率は1.3%（平年3.1%、前年1.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

(2) フェロモントラップにおけるハスモンヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は平年よりやや少なく推移している（P15の図1~図3）。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。
- (2) 幼虫の齢が進むと薬剤の効果が落ちるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。特に、オオタバコガは薬剤がかかりにくい新芽や花蕾に食入するので、よく観察して初期防除を徹底する。

キク チョウ目害虫



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年9月21日～平成26年10月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

	作物名	依頼件数	診断結果(件数)
野菜	アスパラガス	1	斑点病(1)
	イチゴ	6	炭疽病(1)、生理障害等(5)
	キャベツ	16	苗立枯病(11)、菌核病(1)、生理障害等(4)
	キュウリ	5	緑斑モザイク病(1)、退緑黄化病(2)、生理障害等(2)
	タマネギ	5	苗立枯病(1)、白色疫病(1)、疫病(1)、生理障害等(2)
	トマト	5	黄化葉巻病(2)、苗立枯病(1)、生理障害等(2)
	ナス	2	青枯病(2)
	パプリカ	1	モザイク病(1)
	ハクサイ	1	えそモザイク病(1)
	ブロッコリー	6	苗立枯病(4)、生理障害等(2)
	ミズナ	1	リゾクトニア病(1)
	アブラナ科野菜	2	ダイコンサルハムシ(2)
	計	51	
花き	キク	4	萎凋病(1)、黒斑病(1)、生理障害等(2)
	スイートピー	1	生理障害等(1)
	スターチス	2	萎凋細菌病(2)
	トルコギキョウ	4	青枯病(1)、立枯病(1)、生理障害等(2)
	バラ	1	生理障害等(1)
	計	12	

**合計： 17 作物
63 件**

内訳	糸状菌による病害	: 26件
	細菌による病害	: 5件
	ウイルス・ウイロイドによる病害	: 7件
	害虫類	: 2件
	生理障害等	: 23件
	合計	63件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に9月23日～10月24日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
熊本県	注意報	2014/09/26	普通期水稲	トビイロウンカ
岩手県	注意報	2014/10/03	あぶらな科作物	コナガ
静岡県	注意報	2014/10/03	かんきつ、かき、 キウイフルーツ	果樹カメムシ類
長崎県	注意報	2014/10/15	いちご	ハダニ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）				
発信元	日付	作物	内容	
岐阜県	2014/09/24	トマト	モザイク病（T o M V）	T m - 2 ^a 打破系統
佐賀県	2014/09/30	ナシ	ヒメボクトウ	
茨城県	2014/09/30	イチゴ	チバクロバネキノコバエ （別名：チビクロバネキノコバエ）	
福岡県	2014/10/07	ミニトマト、ナス	クロテンコナカイガラムシ	
神奈川県	2014/10/08	インパチェンス	べと病	
島根県	2014/10/09	トルコギキョウ	えそ輪紋病（I Y S V）	
東京都	2014/10/14	トマト	トマト茎えそ病（仮称）（C S N V）	
大分県	2014/07/01	ナシ	炭疽病	
岡山県	2014/10/20	ミニトマト	黄化えそ病（T S W V）	

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）				
発信元	日付	作物	内容	
熊本県	2014/09/26	-	タバココナジラミのC C Y V保毒状況と防除対策	
長崎県	2014/10/01	大豆	吸実性カメムシ類の防除対策について	
佐賀県	2014/10/24	ナシ	チュウゴクナシキジラミの発生状況と防除対策について	

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を散布するときには、農薬の飛散に注意しましょう！

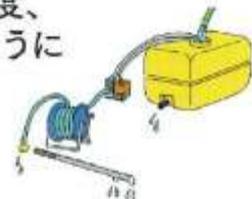
- ・風向きに注意して風の弱いときに散布しましょう。
- ・散布の位置や方向に注意して散布しましょう。
- ・適正なノズルを用いて、適正な圧力で散布しましょう。



農薬の散布前および散布後には、以下に気をつけて農薬事故を未然に防ぎましょう！

農薬を散布する前に注意すること

- ◎ ラベルをよく読んで、対象作物や散布時期を確認しておきましょう。
➡ 事前に確認することで、農薬の使用方法等の誤りを防止できます。
- ◎ 散布に使用する器具のチェックを行いましょ。う。
➡ 器具の不具合による農薬の事故を未然に防げます。
- ◎ 農薬の調整前には、事前に使用する農薬の散布濃度、散布面積等を確認し、必要量を調べて、余らないように調整しましょう。



農薬の散布後に注意すること

- ◎ 残った希釈液は河川、湖沼、用水路、下水等の水系に廃棄しないようにしましょう。
➡ 農薬が河川に流入し、魚などの水産動植物に思わぬ影響を及ぼす恐れがあります。
- ◎ タンクやホースは洗い残しがないうきれいに洗っておきましょう。
➡ 前回使用した農薬をタンクやホース内に残したまま、別の作物に使用すると国が定めた基準値を超過する恐れがあります。
- ◎ 残った農薬による誤飲、誤用等を避けるため、他の容器（飲料用ペットボトル等）への移し替えは絶対に止めましょう。
➡ 移し替えた農薬を、誤って使用したり、誤飲する事故が発生しています。
- ◎ 盗難を防止するため、農薬の保管庫にはカギをかけましょう。



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)